

第140回簿記検定試験

1級 出題の意図

[商業簿記]

(出題の意図)

今回の問題は、これまでと同じように大問1題ですが、決算整理前残高試算表が一部しか記述されておらず、そのため書かれている範囲で解答せざるを得ないという意味においては、少々難しく感じられるかもしれません。

本問には、大きく2つのポイントがあります。その1つは、棚卸資産の払出価額の決定方法と減価償却方法の双方に会計方針の変更があるという点です。それぞれの会計方針の変更についてどう処理するのかがポイントです。他の1つは、減損計上とそれに伴う税効果に関係します。特に、この問題では、繰延税金資産の回収可能性が問われます。

その他のリースや有価証券の処理、新株予約権の処理等は、それほど難しい問題ではなく、全体としては、解きやすい問題だったのではないのでしょうか。

[会計学]

(出題の意図)

第1問は、会計学における概念や処理方法について知識を問う設問です。1級の範囲の中から偏ることなく出題しました。いずれも専門用語を問う設問です。正確に解答する必要があります。

第2問は、会社法上の配当制限について問う設問です。会社法では、まず剰余金の額を確定したうえで、分配可能額を規定しています。会社法の配当制限についてはこれまであまり出題されてきませんでしたので、今回は基本的な知識を問う水準にとどめました。配当に対する会社法の考え方をしっかりと踏まえたうえで、分配可能額の算定方法を理解しておく必要があります。

第3問は、連結キャッシュ・フロー計算書を作成させる問題です。キャッシュ・フロー計算書はしばらく出題されていなかったもので、そろそろ出題を予想していた受験者も多かったのではないかと推測します。直接法に基づくキャッシュ・フロー計算書の作成は、個別でも連結でも基本的には2期間の貸借対照表から各項目の増減額を把握し、これらを損益計算書の関連項目に加減して、キャッシュ・フローを求めていきます。ただ、連結キャッシュ・フロー計算書の作成においては、のれんの処理、非支配株主利益や持分の処理、非支配株主への配当の処理のような特有の処理が必要になってくることに注意が必要です。

[工業簿記]

(出題の意図)

工場会計の独立に関する決算問題です。HIT 社の勘定体系が把握できたかどうかを問うています。予定内部振替価格を用いて本社に販売している工場では、原価管理さえできていれば、利益が確保できるというストーリーの出題でした。

問 1 から問 5 までは、工場損益を計算するための一連の過程です。期中にどのように勘定記入がしてあったのかを推定することになります。問 1 は材料勘定、問 2 は賃金・給料勘定、問 3 は仕掛品勘定、問 4 は売上勘定が注目すべき勘定です。なお、問 3 の製造原価報告書では、直接材料費、直接労務費および製造間接費の合計額でもって当期総製造費用を計算する様式でない点が重要なポイントです。問 5 では、棚卸減耗費に関する処理を含めて工場損益を計算しますので、本社側におかれている棚卸減耗引当金勘定にも関連することに注意してください。

問 6 から問 8 までは、本社側で行う決算処理問題です。問 8 の全体損益を計算する際には、内部利益の戻入と控除も必要となる点に気付いてほしいところです。

[原価計算]

(出題の意図)

第 140 回は、設備投資の意思決定から、貨幣の時間価値を考慮した損益分岐点分析、キャッシュ・フローの計算、貨幣の時間価値の計算、正味現在価値の計算を出題しました。

設備投資の意思決定では、耐用年数経過後に反復投資（同じ投資案に再投資）をするのか、あるいは別の異なる投資案に投資する予定なのかによって、比較方法を変えなければなりません。今回は問 3 において、後者について理解しているかを問いました。過去に出題されたことが極めて少ないため、○をつけさせる形式の問題にしました。比較方法の違いについて、よく学習をしておいてください。

設備投資の意思決定モデルとしてどのモデルがもっとも良い方法かは、それが独立投資案なのか、相互排他的投資案なのかによって異なります。投資案の違いと、もっとも良い方法とされる方法とは何か、それはなぜかについて、理論をしっかり理解してください。